



国分寺市の遺跡で見られる地層の特徴

国分寺市内の遺跡では、通常、以下に示すような地層の堆積が確認され、地表に近い上層から下層に向かって、順に I ~ XI 層のローマ数字を充てています。

まず、現在私たちが生活している地表面付近の地層が表土の「I層」で、建物や道路を造成する際に整地した盛土や畑の耕作土を指します。谷筋などの地層が厚く堆積しているところでは、耕作土の直下には、富士山が宝永四年(1707)に噴出した火山灰をみることができます。この火山灰は関東一帯に降灰して、多くの農作物に影響をおよぼしました。遺跡の発掘調査では、多くの場合、重機を用いながら I 層を取り除いていきます。

その下には、奈良・平安時代～中世の遺物を含む、黒褐色土(黒味の強い土)が堆積し、「II層」と呼んでいます。II層の上面で、I層を覆土とする近世～現代の遺構を確認できます。

II層の下は縄文時代の遺物を含み、褐色土を主体とする「III層」が堆積し、色調の違い等によりIIIa～c層に細分化しています。III層上面でII層を覆土とする奈良・平安時代～中世の遺構が確認でき、さらにIIIb層中には縄文時代中期(約4,000～5,000年前)、IIIc層中には縄文時代早～前期(6,000～8,000年前)の遺物を含んでいます。これらの地層下部で、縄文時代の遺構を確認します。

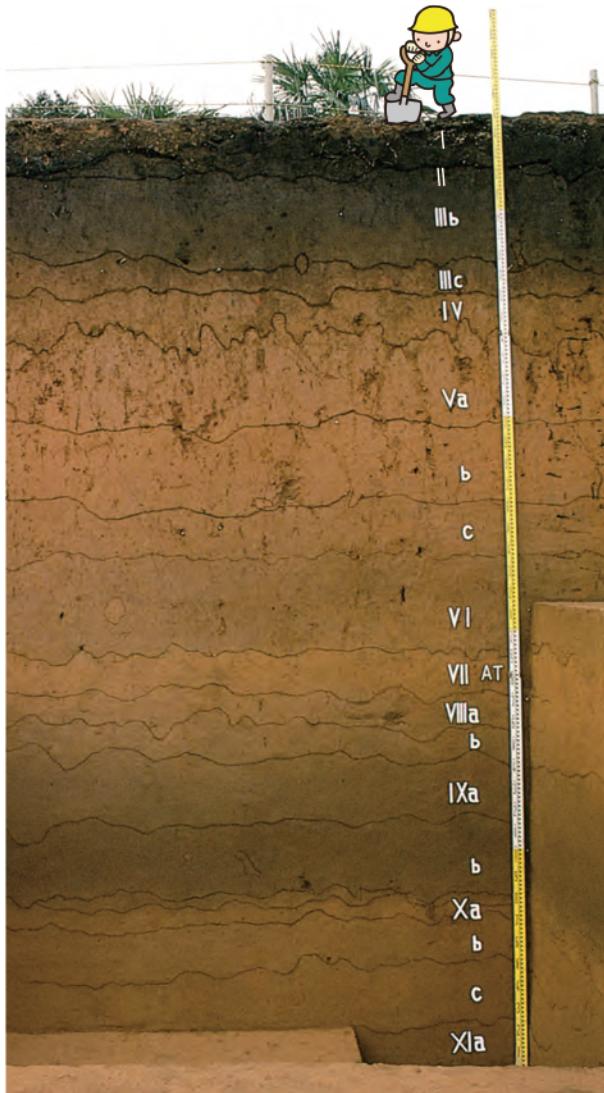
左の写真は、新庁舎建設地と同じ武蔵野段丘上に立地し、市内の内藤二丁目付近に所在する多摩蘭坂遺跡の地層堆積状況を示したもので、写真上方の黒く見える部分が、いわゆる「黒ボク土」で、黄色く見える部分が「関東ローム層」になります。

黒ボク土が黒く見えるのは、微細な炭を多く含むためで、この炭は自然界には存在せず、縄文時代の焼き烟によって生成されたという学説があります。関東ローム層とは、富士山や箱根の火山灰が降り積もった後、風化・乾燥して風に舞い上げられ、再び積もって土地に定着したものです。関東ローム層中には約12,000年以前を遡る旧石器時代の遺跡が確認されることがあります、色の違いや含有鉱物によって市内ではローム層を「IV層」～「XI層」と区分しています。

このうち、「VI層」と「VII～IX層」付近は上下の地層に比べて色味が暗く、「暗色帶」・「黒色帶」あるいは「ブラックバンド」と呼ばれています。黒く見える原因是、草などの植物が腐った腐敗土が多くあったためと考えられています。

暗色帶に挟まれた「VII層」は、AT(始良丹沢火山灰)層とも呼ばれ、上下の地層より色調が明るい特徴があります。これは層中にガラス質の火山灰が多く含まれるために、今から約24,000年～28,000年前に鹿児島の始良山から飛来してきたものです。このような火山灰を広域火山灰と言い、日本各地の地層の年代を対比する鍵になっています。新庁舎予定地南東側の国分寺消防署建設地内で行われた発掘調査では、AT層より上位のV層中からナイフ形石器が確認されています。

なお、多摩蘭坂遺跡や府中市武蔵台遺跡(都立多摩総合医療センター内)からは、さらに遡って約35,000年前にあたるX層中から石器が出土しています。



国分寺市の遺跡で標準的に見られる地層の堆積状況
(多摩蘭坂遺跡)



地層のイメージ



市内最古の旧石器(多摩蘭坂遺跡X層出土)



国分寺市新庁舎建設に伴う発掘調査現場見学会

◆令和4年(2022)6月26日(日) ◆国分寺市・国分寺市教育委員会・ティケイトレード株式会社

未来に向けて生まれ変わる庁舎

国分寺市では、行政サービスの拠点を集約し、良質な市民サービスを提供するとともに、地震等の災害拠点としても十分な機能を備えた新庁舎の建設に向けて検討を進めています。

新庁舎は建築面積4,397.53m²、延床面積21,815.82m²、地下1階・地上5階建て、鉄骨造・鉄筋コンクリート造の免震構造で、令和4年内に建設工事を着手し、同7年1月に供用開始の予定です(令和4年1月公表「国分寺市新庁舎建設 基本設計説明書」より)。



新庁舎外観イメージパース(JR 西国分寺駅側から)
※外観の色彩・屋上防災無線アンテナ等の詳細は実施設計にて検討中

国分寺市の地形

多摩川・入間川・荒川等の流域に挟まれた武蔵野台地は、古多摩川が関東山地から運んだ砂礫層を基盤として、その上に関東ローム層が厚く堆積した地形で、青梅付近から東へ徐々に標高を下げながら、約50kmにもおよんで扇状地状に広がっています。

その中央やや南側寄りに位置する国分寺市域には、国分寺崖線を挟んで北側の一段高い「武蔵野段丘」(標高70～92m)と、南側で一段低い「立川段丘」(標高55～66m)の河岸段丘があり、前者は約6万年前、後者は約4万年前にそれぞれ古多摩川が離水して形成されました。その後、おもに富士や箱根由来の火山灰が降り積もりながら、多摩川の名残川である野川が武蔵野段丘の縁辺部を浸食して幾つもの小さな谷を刻み、谷筋からは豊富な湧水が湧出しています。



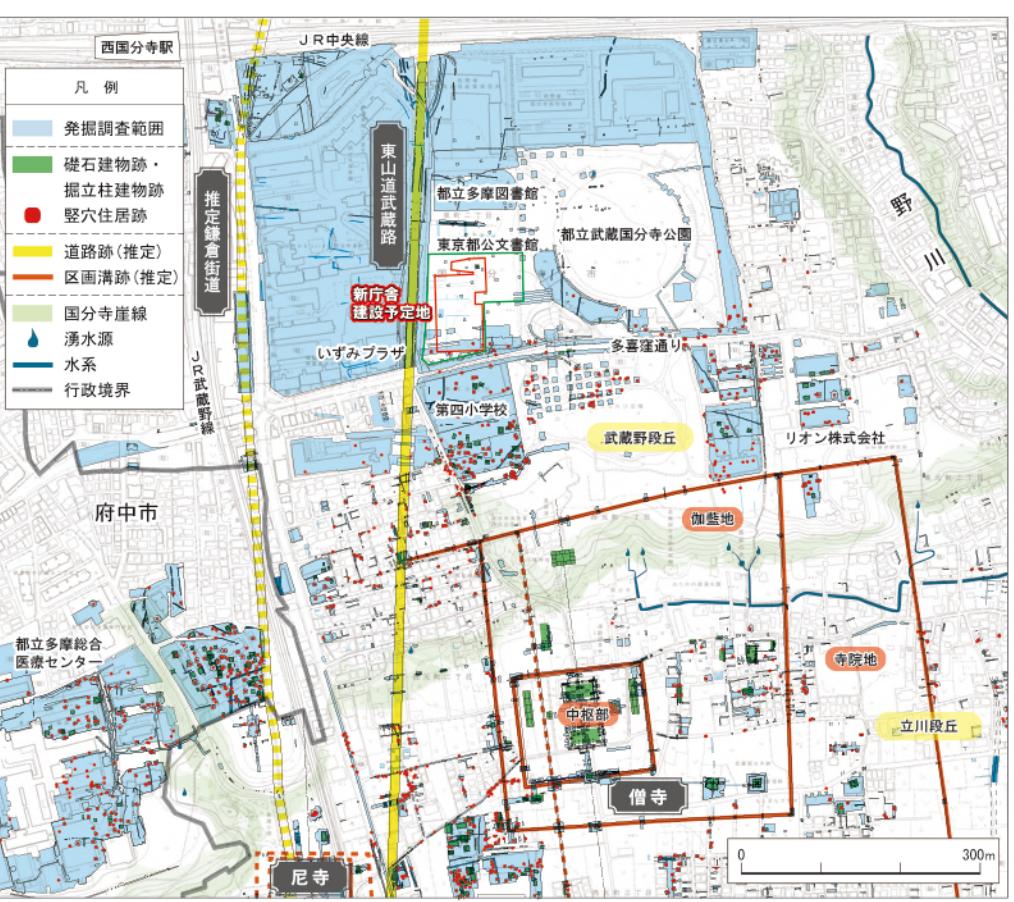
国分寺市域の地形区分

武蔵国分寺と新庁舎建設予定地

新庁舎建設地の泉町二丁目付近は、JR中央線が走る恋ヶ窪の谷と国分寺崖線に挟まれた標高約80mの武蔵野段丘上にあり、「武蔵国分寺跡(No.19遺跡)」と呼ばれる埋蔵文化財包蔵地に該当します。これまで周辺では、開発に伴う発掘調査を数多く実施し、旧石器・縄文時代、奈良・平安時代、中～近世の遺構や遺物が発見されました。市では新庁舎建設工事に伴う発掘調査を3～8月の予定で進めています。

また、調査地点は古代武蔵国分寺の伽藍地・寺院地の北方近接地に位置し、現在のリオン株式会社構内付近から市立第四小学校を経て、都立多摩総合医療センターにかけての一帯は、国分寺を支えた庶民の竪穴住居が多数確認され、調査地点西側は東山道武蔵路が南北に縦貫しています。

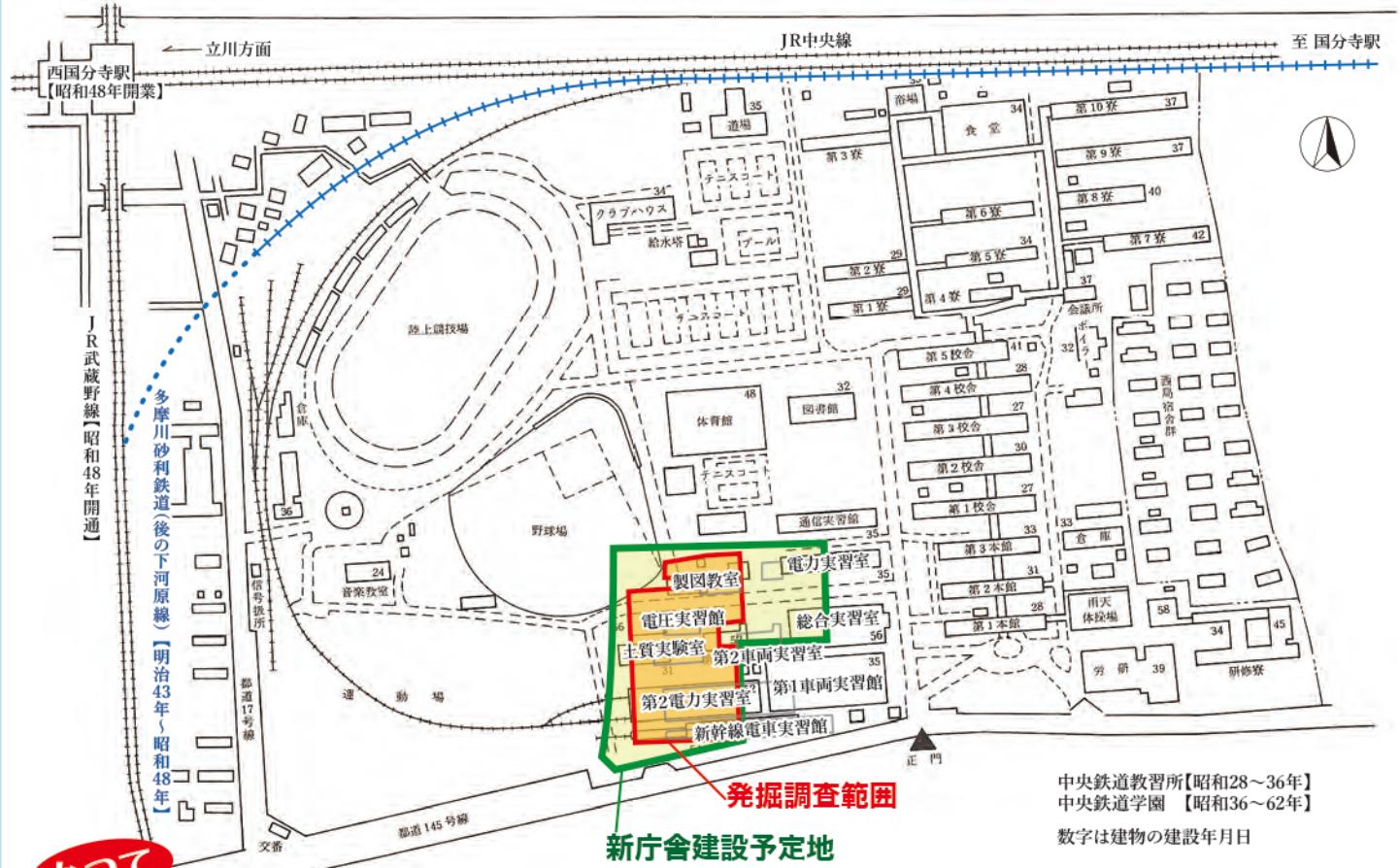
発掘調査の結果、こうした竪穴住居が建ち並ぶ古代の集落範囲は、現在の多喜窪通り付近より南側にかけて広がる様相が判明し、それは崖下の湧水を生活の縁としていたためと思われます。



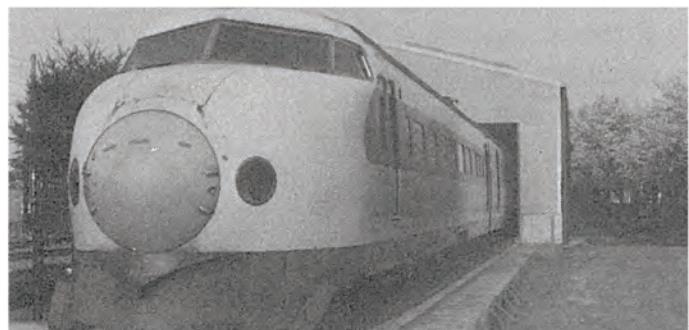
調査地点と周辺の発掘調査状況(奈良・平安時代を中心)。

中央鉄道学園平面地図

(日本国有鉄道中央鉄道学園発行『中央鉄道学園史』を一部加筆)



新幹線が走っていた?! 鉄道のまち 泉町



新幹線電車実習館の新幹線0系車両
〔日本鉄道技術協会刊行『JREA』第22巻8号より転載〕



新幹線資料館

「ひかり号」にあやかって命名

JR 国立駅の北側にあたる「光町」は、かつて大部分が平兵衛新田と呼ばれていました。東海道新幹線の開発・研究を進めていた鉄道技術研究所があったことから、昭和41年の町名・地番整理により、新幹線「ひかり号」にあやかって「光町」と命名されました。



市へ無償譲渡されました

ひかりプラザ北側に設置された新幹線試験車両951形は、昭和44年に製造され、昭和47年に開通前の山陽新幹線西明石から姫路間で、時速286kmの当時世界最高記録をだした記念すべき車両です。平成3年12月7日、現在の公益財団法人鉄道総合技術研究所から市へ無償譲渡され、新幹線発展の歴史をパネル、模型等で紹介する新幹線資料館として開設しています。



〔開館〕午前9時から午後5時まで
※毎月第2・第4曜日(祝日に当たる場合その翌日)は休館
〔住所〕光町1丁目46-8 [TEL] 042-574-4044(社会教育課)

昭和59～62年頃の中央鉄道学園と発掘調査地点



泉町の中央鉄道学園

昭和24年6月に日本国有鉄道法が施行されると、運輸省鉄道総局を主な母体とする公共企業「日本国有鉄道(国鉄)」が誕生しました。国鉄は東京や三島など各所に付属機関の教習所を設置していましたが、昭和28年9月に中央鉄道教習所の本所を国分寺へ移転し、その後、昭和36年4月に中央鉄道学園と改称されました。

学園は約22万m²の敷地に校舎・実習設備・図書館・学生寮・陸上競技場・野球場などを備え、国鉄の中核的な教育機関としての役割を果たしました。また、多摩川の砂利を採取する目的で明治43年に国分寺下河原間で開業した東京砂利鉄道(後の下河原線)の軌道の一部を利用して引き込み線が敷かれ、構内には新幹線0系・101系電車・EF60形機関車など、古い鉄道車両が教育目的で多数配置されていました。

昭和62年に国鉄の分割民営化に伴い施設は閉鎖され、現在、元の敷地には都市再生機構・東京都・東京都住宅供給公社の高層団地群、総務省情報通信政策研究所、都立武蔵国分寺公園・多摩図書館、東京都公文書館などの施設が立ち並んでいます。

コラム②

国分寺市の遺跡と鉄道敷設の関わり 明治時代の甲武鉄道敷設と本町(国分寺村石器時代)遺跡の発見

現在はビルが建ち並び、商業地として賑わう国分寺駅界隈は、もともとは「本多谷」「殿ヶ谷戸谷」と呼ばれる野川源流域の開析谷が段丘崖を深く抉り、幅狭い台地が南方へ大きく張り出した起伏のある地形をしています。国分寺駅北口の東側一帯には、「本町(国分寺村石器時代)遺跡」と呼ばれる縄文時代の遺跡がありますが、この遺跡は1889(明治22)年に新宿一立川駅間で甲武鉄道(いまのJR中央線)が開通して間もなく、多摩川沿岸の遺跡を訪れた鳥居龍藏と井上喜久治らが「汽車国分寺に停車す。夫より其舊蹟たる同村に至らんと線路の踏切を越ゆ。此續きに一つの丘陵を切開きたる處あり茲にて縄文土器の破片を得しかば尚ほ仔細に其崖を見るに果して石世期の遺物たる土器並に石器を得たり」と報告したことにより、考古学史上で極めて重要な遺跡として注目されています。

国分寺駅から新宿駅方面へ向かう車窓を注意深く観察すると、JR中央線の軌道は台地を東西に切り通して敷設している様子がわかります。現在の国分寺駅北口駐輪場入口には、本町遺跡を紹介した遺跡解説板が設置されています。

